孔子と異相

若槻俊秀

孔子が中国思想史上、最も重要な人物であるとすることに対して異を唱えるものはなかろう。孔子は、紀元前四七九年、七三歳にして生涯を終えているが、その生前の言行の数々は、孔子の後学の手によって編纂された『論語』二〇篇のうちに記録されている。そこには「我は生れながらにしてこれを知る者に非ず。古えを好み敏にして以てこれを求むる者」（述而）、「聖と仁との若きは、則ち吾れ豈に敢えてせんや。抑々これを為して厭わず、人を誨えて倦まざるは、則ち謂うべきのみ」（同上）とする学問好きの孔子が描き出されている。また「怪・力・乱・神を語らず」（述而）と評されるように、怪異なことがら、神秘なことがらについて黙して語らない孔子が、そして弟子の季路が神霊に対してどう仕えるべきかを問うたのに対し、「未だ人に事うる能わず、焉んぞ能く鬼に事えん」と答え、「敢えて死を問」う季路に、「未だ生を知らず、焉んぞ死を知らん」（先進）と答える孔子がみえている。この数ケ条の記事からも、孔子は、日常われわれが耳目で見聞しうる現実に脚をふまえて思惟を行なった哲人として、したがってわれわれの感得しえない現実を超えた世界には決して飛翔しなかった人物として理解されるであろう。「樊遲　知を問う。子曰く、民の義に務め、鬼神を敬してこれを遠ざく、知と謂うべし」（雍也）というように、人としての正しい道に務め、神霊には崇敬の念を抱きながらも遠ざけておくことが智者たるものの態度であり、これが、つまり孔子の立場であったのである。

ところが、「生知」なるもの、「聖」なるものではなく、

好学の人物たることを越えないとする孔子の自己認識にもかかわらず、死後において次第に偉人をもって観られたり、あまつさえ神格の持ち主として崇められるまでに孔子の地位は引き上げられていくことを知ることができる。孟子はいう、

孔子より而来、今に至るまで百有余歳。聖人の世を去ること此の若く其れ未だ遠からず。聖人の居に近きこと此の若く其れ甚だし。（尽心下）

と。孟子は孔子を「聖人」と明確にみたわけであり、孔子が「聖人」として表現される最初の記事である。ここには孟子の孔子を継承する者としての自負と、孔子への大なる崇敬の念がうかがえる。さて、このようにして聖人に位置せしめられた孔子は、漢代になると一層の確固たる地位を獲得することになる。ことは国教となった漢代の儒教との関りにおいて考察せねばならないが、しばらく『漢書』古今人表に示される孔子の位置づけにとどめて述べてみることにする。「古今人表」とは、上古より漢に至る歴史上の人物をとりあげ（その数は約二千名）、すべてを次の九品等に配列したものである。上上・上中・上下、中上・中中・中下、下上・下中・下下とし、上上は聖人のクラス、上中は仁人、上下は智人、下下は愚人としたものであって、孔子はそのうちで「上上」、聖人の欄に配されている。つまり宓羲・神農・軒轅・少昊・顓頊・帝嚳、堯・舜・禹、湯王・文王・武王・周公につづいて記載されているのである。このことによって漢人が孔子を特別な眼で仰ぎ視ていたことを知るわけであるが、次に漢代において孔子に対する崇敬の念の一層のたかまりのあらわれとして、孔子が単なる聖人ではなくて素王（無冠の帝王）であったとする説が生じていることに注目したい。『文選』所収の杜祐の春秋左氏伝序は、「仲尼衛より魯に反り、春秋を修め、素王を立て、丘明を素臣と為す」と説くものがあったことを述べている。つまり孔子は春秋を著わして、そこに素王としての法を立てたという。孔子は素王であるとする考え方から、つぎに制作の王たるものに特有の出世にまつわる不思議な話・感生帝伝説が、孔子にも加わることになった。いわゆる漢代に大流行した緯書なるものがあるが、そこには豊富に感生説話が収載されている。孔子に関してその一、二例をあげると、次のごとくである。

孔子の母顔氏徵在、大沢の陂に游び、睡りて黒帝の使請し、已に往きて語を交わすを夢む。曰く、汝乳するに必ず空桑の中に於てせんと。覚むれば則ち感ずるが若し。邱（孔子の名）を空桑に生む。（『春秋演孔図』）

叔梁紇、徵在と尼丘山に禱る。黒龍の精に感じて、以て仲尼を生む。（『論語譔考』）

このように孔子は、黒帝・黒龍の精をうけて生まれたとされるようになったわけである。しかも、そのように不思議な出生をしたからには、風貌も必ず特異な様子をしていると考えられ、種々の表現で示されるようになるのは当然であったであろう。狩野直喜氏がこの感生帝としての孔子について述べていられるのによると、

（一体孔子に対する崇敬、若くは信仰といふものは、総べての偉人に共通なる如く、孔子の時を去れば、其れ丈強烈になつたと思はる。……孟子となれば、孔子より百余年の後に生れ、又諸子の学盛んに行はるときに当り、孔子の道を張らんとする熱心があるから、勢ひ他を排斥して、独り孔子を尊ばざるべからず。それで……孟子となれば、此等の聖賢と孔子とを引離し、独り孔子を揚げたり。……漢に至り、……同じく儒学の内にても、孔子天命を受けて新たに漢の為めに法を制したる事を高潮したる今文学派のみ、学官に立てられたる結果として、儒学に宗教的権威附加され、孔子の一尊を立てて、之を崇敬する事が余りつよかりし為め、感生の説までも起りしものと思ふ。……『両漢学術考』）

と。狩野氏も説明されるように、上述の孔子の人間像の変遷は、孔子に対する後学の崇敬の強さがひきおこした結果である。同時にその一見して荒唐の説とみえる描写は、ひるがえって、その時の人びとの何らかの真実の姿を示してくれているものといえよう。

本論は、この神秘的な存在者となった孔子について、特に異相（特異な相貌）ということに焦点をあて、それがどのように述べられているか、またどのように理解されてきたかをとらえて少しく考察したものである。

一

孔子は素王――無冠の帝王――であったということから、孔子に帝王たる資格を具えしめるため緯書ではいろいろ説明を加えている。そのことを安居香山氏の説に依りながら述べてみることにする（安居香山・中村璋八著『緯書の基礎的研究』緯書の孔子観）。安居氏は、緯書の中よりまず三条をあげられる。

○孔子母顔氏徵在、游大澤之陂、睡夢黒帝使請、已往交中語、曰、汝乳必于空桑之中、覺則若感、生邱於空桑之（春秋演孔図）

○孔子母徵在、夢感黒帝而生、故曰元聖（春秋演孔図）

○叔梁紇與徵在禱尼邱山、感黒龍之精、以生仲尼（論語

譔考）

前二者は黒帝に感じての感生説、最後は黒龍の精に感じての感生説で、共に孔子の出生を感生説に関連づけた説であり、帝王ならざる孔子を帝王に類するもの、あるいは帝王化せんとしたものとされる。さらに氏は、孔子の帝王化のもう一つの例として、緯書における孔子の異常風貌説を示される。それは、

○仲尼海口、言若含海澤（孝經鉤命決）
○仲尼龜背（孝經鉤命決）
○仲尼虎掌、是謂威射（孝經鉤命決）
○夫子輔喉（孝經鉤命決）
○夫子駢齒（孝經鉤命決）
○孔子胸應矩、是謂儀古（論語摘輔象）

などの表現をとるもので、すべて孔子を特異化し、権威化するものである、と述べられる。なお安居氏は本書では特に取りあげておられないが、編著『緯書集成』春秋演孔図の条に、

孔子長十尺、海口尼首、方面、月角日準、河目龍顙、斗脣昌顔、均頤輔喉、齗齒龍形、龜脊虎掌、胼脅修肱、參膺圩頂、山臍林背、翼臂注頭、阜脥堤眉、地足谷竅、雷聲澤腹、修上趨下、未僂後耳、面如蒙倀、手垂過膝、耳垂珠庭、眉十二采、目六十四理、立如鳳峙、坐如龍蹲、手握天文、足履度字、望之如朴、就之如升、視若營、四海躬履、謙讓、腰大十圍、胸應矩、舌理七重、鉤文在掌、胸文曰制作定世符運

というような、詳細な記載がある。あたかも後に仏教徒が仏陀の異相として三十二相を説くのと似た趣がある。

ところで上述した感生説話、特異相貌としての孔子像を眺めたとき、感生説には確かに神秘化の意図が重く意識されているのは事実であるが、異相については神秘化という点では少し異った趣があるように見受けられる。それは、偉人と目される対象に向けられた一般人の人物評論に、通常語られる如き表現が多いということである。いわばその表現には、あるいは普通にあるかも知れないと思わせる面が多分に含まれていることである。このことから、孔子の神秘化の手段として最も貢献度の大きいものは感生説であり、異常相貌は附随的役割をはたしたに過ぎないと考えてよいかもしれない。その証拠に、漢王朝崩壊以後の歴代王朝の始祖等にみえる特異表現は、すべて異相部分に限られていることによって知られる。左に列記したものは、六朝における始祖等に対する異相表現のいくつかである。

○身長七尺五寸、垂手下膝、顧自見其耳

（『三國志』蜀先主伝）

○聰明神武、有超世之才、髪委地、手過膝、此非人臣之相也（『晋書』武帝紀）
○及長、白豪生於日角之左、隆準龍顔、目有精曜、顧眄煒如也……毛骨非常、殆非人臣之相也（『晋書』元帝紀）
○及長、身長七尺六寸、風骨奇特（『宋書』武帝紀）
○姿表英異、龍顙鐘聲、鱗文遍體（『南齊書』高帝紀）
○生而有奇異、兩骼駢骨、頂上隆起、有文在右手曰武（『梁書』武帝紀）
○身長七尺五寸、日角龍顔、垂手過膝（『陳書』高帝紀）

これらには、緯書においてあれほど盛んに説かれた感生伝説が、一つも見られない。これは何を意味するのであろうか。

ところが、右にあげた例は大部分南朝の天子に関するものであるが、次にあげる北朝の天子を記すものには少しく趣を異にするものがある。

○母曰獻明賀皇后、初因遷徙、游雲澤、寢、夢日出室內、寤而見光自牖屬天、欻然有感、以建國三十四年七月七日、生帝於參合陂北、其夜復有光明……帝弱而能言、目有光曜、廣顙大耳（『魏書』道武帝紀）
○母……生於平城紫宮、神光照室、天地氛氳、和氣充塞、帝潔白有異姿、襁褓岐嶷、長而弘裕仁孝、綽然有人君之表（『魏書』孝文帝紀）
○母……初夢爲日所逐、避於牀下、日化爲龍、繞己數匝、寤而驚悸、遂有娠（『魏書』宣武帝紀）
○武明太后初孕帝、每夜有赤光照室、太后私怪之、及產、命之曰、侯尼于、鮮卑言有相子也……及長、黑色、大頰兌下、鱗身重踝……（『北史』文宣帝紀）

一往に感生説と特異相貌を記す、これらの記載は、漢代に流行した緯書中の書きぶりに同じい。また南北両王朝を一統した隋の高祖についても、その北朝系の統一王朝の性格を示すかのように、北朝流の書きぶりがみられる。

皇妣呂氏、以大統七年六月癸丑夜、生高祖於馮翊般若寺、紫氣充庭、有尼來自河東、謂皇妣曰、此兒所從來甚異、不可於俗間處之、尼將高祖舍於別館、躬自撫養、皇妣嘗抱高祖、忽見頭上角出、徧體鱗起、皇妣大駭、墜高祖於地、尼自外入見曰、已驚我兒、致令晚得天下……爲人龍顔、額上有五柱入頂、目光外射、有文在手曰、王、長上短下、沈深嚴重……周大祖見而嘆曰、此兒風骨、不似代間人（『隋書』高祖紀）

以上、隋をも含めて北朝の天子には感生帝としての表現がうかがえるのではあるが、それでも緯書流の荒唐無稽な表現は随分と弱まり、合理的な方向へと進みはじめていることを知りえた。それにもかかわらず異相表現は、依然とし

て絶えることなく、維持されているよかにみえるのは、どこに起因するのであろうか。

二

『荀子』に非相篇がある。荀子はその中で、当時の人びとが人の容貌・骨子を見て、その吉凶・貴賤を卜うことに奔走し、妄誕の者がその時流に乗じて世を惑わし、また軽薄な輩はこれを信じて、心身の修養を怠っているのをみて、相術を排撃する。非相篇の内容は次のようである。

相人、古之人無有也、學者不道也、古者有姑布子卿、今之世梁有唐擧、相人之形狀顔色、而知其吉凶妖祥、世俗稱之、古之人無有也、學者不道也、故相形不如論心、論心不如擇術、形不勝心、心不勝術、術正而心順、則形相雖惡、而心術善、無害爲君子也、形相雖善、而心術惡、無害爲小人也、君子之謂吉、小人之謂凶、故長短小大、善惡形相、非吉凶也

君子・小人の判断は形状の長短・大小とか、人相の美醜などは吉凶と無関係であり、心術のあり様こそ大切なのであるとするこの主張は、逆に人相の説が多くの支持をえていることを示すものである。荀子はさらに続けて、それを歴史的事実によって明らかにしていく。

蓋帝堯長、帝舜短、文王長、周公短、仲尼長、子弓短、昔衞靈公有臣、曰公孫呂、身長七尺、面長三尺、焉廣三寸、鼻目耳具、而名動天下、楚之孫叔敖期思之鄙人也、突禿長左、軒較之下而以楚霸、葉公子高、微小短瘠、行若將不勝其衣、然白公之亂也、令尹子西、司馬子期、皆死焉、葉公子高入據楚、誅白公、定楚國、如反手耳、仁義功名善於後世、故士不揣長、不揣大、不權輕重、亦將志乎心耳、長短小大、美惡形相、豈論也哉

学術の正否が君子小人を決定するのであり、身体の長短大小や容貌の美醜などは問題ではないとするのである。

徐偃王之狀、目可瞻馬、仲尼之狀、面如蒙倛、周公之狀、身如斷菑、皐陶之狀、色如削瓜、閎夭之狀、面無見膚、傳說之狀、身如植鱗、伊尹之狀、面無須麋、禹跳、湯偏、堯・舜參牟子

このように古来の聖賢たちはみな容貌怪異な醜男子であったのであり、要するに心のあり方の正否が君子の価値を決定すると言うわけである。緯書において崇敬の念をもって語られる聖人の異相も、荀子にかかれば単なる醜い相貌に下落してしまっているわけで、人間を冷静な眼で見すえる荀子の面目が躍如たるものがある。孔子の長身も蒙倛（髪

の毛ぼうぼうの鬼やらいの面）の如き異相も、何らとるべきものもない、単なる特長とされるだけとなる。

この立場は、儒家の合理的一面として常に見出されるものであることを、唐の文人柳宗元の「観八駿図」をみることによって理解される。柳宗元はここで世間の聖人についての見方として、聖人が一般の人間と異なるというあまり、「伏羲は牛首と曰い、女媧は其形蛇に類ると曰い、孔子は倪の頭の如し」と伝えているが、全く根拠のないことであるとして、次のように結ぶ。

孟子曰、何以異於人哉、堯・舜與人同耳、今夫人、有不足爲負販者、有不足爲吏者、有不足爲士大夫者、有足爲者、視之圓首横目、食穀而飽肉、絺而凊、裘而燠、一也、推是而至於聖、亦類也、然則伏羲氏女媧氏孔子氏、是亦人而已矣

聖人といえども人間に違わない。超人ではないのであるから、奇妙な伝説に心を驚かせる必要はないとするこの考え方は、荀子にもみられるごとく儒教を奉ずる知識人の合理的思惟の伝統をうけているものである。

三

偉人の異相を問題にし考察してゆくならば、どうしても後漢の思想家王充に注目せねばならない。かれは『論衡』を著わし、そこで人の相貌をいくたびとなく取りあつかっている。骨相篇はその最も端的なものであるが、そこでの考え方を以下に示してみることにする。

人命は知り難しと曰うも、命は甚だ知り易し。之を知るに何を用てする。之を骨体に用う。人は命をば天に稟く。則ち体に表候あり。表候を察し以て命を知るは、猶お斗斛を察し以て容を知るがごとし。表候とは、骨法の謂なり。

人の命は骨ぐみに現われている。つまり骨ぐみは、命のあらわれであり、先天的に決定されているのだということになる。したがって偉大なる人物は、当然すぐれた骨相を具有している、として次のごとく述べる。

伝に言う、黄帝は龍顔、顓頊は戴干、帝嚳は駢歯、堯は眉八采、舜の目は重瞳、禹の耳は三漏、湯の臂は再肘、文王は四乳、武帝は望陽、周公は背僂、皐陶は馬口、孔子は反羽と。斯の十二聖は、皆帝王の位に在り、或いは主を輔け世を憂う。世の共に聞く所、儒の共に説く所にして、経伝に在る者、較著信ずべし。……蒼頡は四目にして、黄帝の史為り。晋の公子重耳は仳脇にして、諸侯の覇為り。蘇秦は骨鼻にして、六国の相

為り、張儀は仳脇、亦た秦魏に相たり。項羽は重瞳にして、虞舜の後と云い、高祖と天下を分ち王たり。陳平は貧にして飲食足らざるに、貌体佼好なれば、衆人之を怪しんで曰く、平は何を食いて肥ゆると。韓信滕公の鑒る所と為りて、鈇質を免るるに及ぶは、亦た面状の異有るを以てなり。高祖は隆準龍顔美鬚、左股に七十二の黒子有り。

ここにみえたる異相は、既に緯書中に大部分語られているものばかりである。王充によれば偉人となるべき秀れた人物は、生まれつき貴き命を賦与されているので、それは骨相にもあらわれているということになる。こうなると、緯書にみえたる異常相貌も、すべて荒唐の説ではなく、理の通ったものとして容認されるわけである。かくして歴史事実に即しながら、相者の観察の確かさを列挙し、骨法観察が正鵠をえていることを証明するのである。

また感生帝説として緯書において説かれているものも、王充により合理的な説明が与えられ、正当性をうることになる。それを吉験篇にみてみよう。

凡そ人、貴命を天より稟くれば、必ず吉験の、地に見わるる有り。地に見わる、故に天命有りとす。験の見わるるは、一に非ず。或いは人物を以てし、或いは禎祥を以てし、或いは光気を以てす。

と述べ、貴位につく者は必ず貴命を稟けており、それは必ず吉験を伴って発動するとする。たとえば漢の高祖にそれをみるならばこうである。

高皇帝の母は劉媼と曰う。嘗て大沢の陂に息し、夢に神と遇う。是の時雷電晦冥し、蚊龍上に在り。生るるに及んで美質有り。性好んで酒を用う。嘗て王媼・武負に従って酒を貰し、飲酔して止臥せしとき、媼・負其の身に常に神怪有るを見、毎に留めて飲酔せしめ、酒售るること数倍なり。後に沢中を行き、手づから大蛇を斬りしに、一嫗道に当りて哭して云う、赤帝子、吾が子を殺すと。此の験、既に著聞なり。秦の始皇帝常て曰く、東南に天子の気有りと。是に於いて東遊し、以て之を厭当せんとす。高祖の気なりき。呂后の与に芒碭山沢の間に隠るるや、呂后人と之を求めしむ。其の上常に気有りて直起するを見、往き求むるに、輒ち其の処を得たり。……初め姙身のとき蛟龍の神有り、既に生まるるや、酒舎に雲気の怪を見、夜行きて蛇を斬り、蛇嫗悲哭し、始皇・呂后は光気を望見し、項羽殺を謀り、項伯為に蔽い、謀遂に成らず、良・噲に遭うを得たり。蓋し富貴の験は、気見われて物応じ、人

助けて輔援くるなり。

こうして漢の高祖の不思議な物語にも十分なる説明がつけられたのである。

ただ、ここで注意しなければならないことがある。王充は、貴命をうけた者が貴位を得るときには、必ず吉験があるというのであって、感生説のごとき、天の精を稟けて生まるというのとは相容れない一線が画されていることを知らねばならない。そのことは、怪奇篇の次の記述により理解される。

龍に感ずると、夢に神に遇うとは、猶お此の率のごとし。堯・高祖の母、適々懐妊せんとし、雷龍の雲雨に載りて行くに遭逢し、人其の形を見て、遂に之を然りと謂えり。夢に神と遇うは、聖子を得るの象なり。夢に鬼を見て之に合うは、夢に神と遇うに非ずや。安んぞ其の実を得ん。野に出でて龍に感ず、及び蛟龍の上に居るは、或いは堯・高祖、富貴の命を受け、龍は吉物為れば、遭々其の上に加わりしにて、吉祥の瑞は受命の証なり。光武皇帝の済陽宮に産まるるや、鳳凰、池に集まり、嘉禾屋に生ず。聖人の生まるるや、奇鳥吉物の瑞応と為るも、必ず奇吉の物見われて子生まるるを以て、之を物の子と謂わば、是れ則ち光武帝は嘉禾の精、鳳凰の気か。……帝王の生まるるや、必ず怪奇あり、物に見われずんば、則ち夢に効あり。

結局、聖人も人の精気を受けるものであり、別に天から精気を稟けて生まれたわけではないとするのである。そしてたまたま貴命を受けているゆえに、それが一見怪奇な事象を伴って現われたのではないかとしているにすぎないのである。聖人孔子についての見方も、この天人非相関説にもとづいて考えられているわけで、特別天の精を稟けて生まれたのではなく、人の精を受けて出生したもの。ただ貴なる命を稟けた結果、骨相に特異なあらわれ方がみえるのであって、つまりは人倫の至りたる存在であるということになる。しかし、このことは王充が孔子を軽視したことには決してならない。人倫の範囲内にとどまり、その中で能う限りの努力をした孔子に対し強い敬愛の念を抱いていたことは、『論衡』全篇に数多くみえている聖哲としての孔子の描写に示されていることから理解されることである。

四

中国の文献資料には、「某甲が某乙を相して……」という記事が、時代によって途絶えることなく出てくる。人相を占うことは、その意味では最も興味のあることだったよ

うに思える。特に偉人の思想が大きな共鳴を得るような場合、その偉人に対する崇敬の念が強まって、さまざまな神秘的事象が附加されるのは、自然のなりゆきであろう。荀子・王充・柳宗元は儒家における合理的精神の持主たちであるが、かれらは聖人像が非合理の世界に入りこもうとした時に、それぞれ歯止めをかけようとしたのであった。しかし非合理の世界への、人びとの志向に対しては、どの位の抑止力をもっていたであろうか。

神格化された孔子像を支えておった漢帝国の崩壊後も、孔子はなかなか人間に引き下げてもらえなかったのではないか。六朝における仏陀の教え（仏教）の盛行は、それに対抗する儒家側において中国聖人のチャンピオンとしての孔子に、漢代とは違った新たな任務を課したのではなかったか。隋、釈彦琮の「通極論」に、

暨吾師生也、坤形六動、方行七步、五淨雨花滿國、二龍灑水遍空、神瑞畢臻、吉驗總萃、觀諸百代、曾未之有、然復孕異堯・軒、產殊禹・契、至如黑帝入夢之兆、白光滿室之徵、徒曰嘉祥、詎可擬議、身邊則金色一丈、眉間則白毫五尺、開萬字於胸前、躡千輪於足下、大略以言、三十有二、非可以龍顏、虎鼻・八采・雙瞳、方我妙色、校其昇降者也（大正藏經五二・一一四・a）

と仏陀の偉大な姿は、中国の聖人の到底及ぶものではないという。儒家側がそれに対して無反応であったはずがない。また釈法琳の「弁正論」に、

如來有紅瓜・紺髮・果脣・花目・萬字・千輻・月面・日輪、三十二相八十種好、所著之衣、金縷織成、坐千葉蓮花之上、有形可圖、有相可彩、老子鼻有雙柱、兩耳・參漏・頭尖・口高・厚脣・疎齒、脚蹈二五之畫、手把十字之文、戴法天之冠、曳像地之履、髮白面皺、顏老色衰（大正藏經五〇・五四五・c）

と仏陀と老子、つまり仏教と道教の教祖の相貌の優劣を述べたてる。このような教祖の相貌への関心の強さは、背後に多くの支持層があることを予想させる。

以上のことから思うに、他人の相貌への関心の深さは、中国の人びとのもつ特質の一面であるのではなかろうか。中国の人びとは、早い時期に人格を有する神を失ったとみられているが、そうであれば特異相貌をもつ聖人への特別な尊崇の念は、何か神的なものを求めてやまない中国の人びとの切なる思いのなせるわざであったとみてよいのではなかろうか。

（本学助教授　中国文学）